

「自分の心を動かして」 2022/2/6

マルコによる福音書4:21-34

辻 秀治

お腹が空いている時に、アピタに買い物にいくと、余計なお惣菜を一品多く買ってしまいがちです。そして結局、食べ切ることができず残して冷蔵庫に片づけることになります。でも、お腹が空いていないときに買い物に行くなら、焦ることなく冷静に判断し、必要なものを必要なだけ買うことができるのです。人は、お腹が満たされているなら、心も落ち着くものです。

そして、この【満たされたこと】が天国とは何かを考える上での、一つのキーワードとなります。天国とは、頭上の空間を表す言葉ではありません。天国とは、すべての事柄が必要十分に神から恵みとして与えられていて、すべてが満たされている状態、のことだからです。

世間で広く認識されている感覚では、この天国について、人がこの世の歩みを終えた後、つまり死の後に辿り着く国として受け止めら

えず、減ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる。(イザヤ書11:9) 天国では狼も豹も獅子も小羊や子山羊と共に住む、とあります。毒蛇も蝮も幼子と戯れます。それは猛獣も蛇も満腹で満たされているので、他の動物を攻撃も捕食することもしないのです。そもそもアダムが追放されたエデンの園こそが、天の国そのものです。この園に於いては、食べ物も生きる場所も、必要のすべては神から与えられていて、アダムとエバも含め、すべての生き物は満たされているのです。

そしてもう一つ、大事なことが新約聖書に記されています。それは主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けた後、荒野に退かれ、四十日間サタンの誘惑を受けられた、という記事の中にあります。聖書はこう書き表します。主イエスは「その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。」(マルコ福音書1:13) この「野獣と一緒におられた」という言葉の意味は

れています。確かにそれでも間違いではありません。なぜなら、この世に生きる誰もが、この世の命を終えた後には、神の御前に迎えられ、天国に招かれるからです。主イエスの時代のユダヤ人たちも同じように考えていました。つまりこの世の終わり、終末が来たとき、それまで陰府(シエモール)に寝かされていた者たちと共に、人々はメシア(救世主)に立ち上がり、神に招き入れられ天国に入るので。でもその時、目に見える世界はまったく滅びる、消え去ると考えられていました。洗礼者ヨハネでさえも、そのように考えていました。ですから彼は、終末が来る前に悔い改めなさいと、人々に話します。その言葉を聞いて恐れた人々は、世界が滅びる前に水による洗礼を受けて、少しでも自分の罪を軽くしておこうと、洗礼者ヨハネの下に殺到したのです。

しかし、主イエスは、そう教えませんでした。人はこの世の命のただ中であつても天国を先取りできる、と教えたのです。そして終末

「天使が守っていたから野獣に襲われなかった」ではなく「野獣たちは主イエスと共に満たされていた」という意味です。つまり主イエスは荒野という過酷で荒れ果てた地上に天国を創造されるのです。主イエスは天国を先取りして味わい、この幸いを、世へと伝え始められます。「時は満ち」た(マルコ福音書12:35)と宣言し、二匹の魚と五つのパン(マルコ福音書6:41)で人々を満たします。人々と天国の幸いを分かち合われるのです。

さて、私たちは【既に】神によって満たされています。【既に】この世に天国は来ているのです。また使徒パウロの言葉を引きますが。彼は「わたしの恵みはあなたに十分である。」(二コリント12:9)と話します。これが主イエスの話す福音の言葉であり、今朝与えられました御言葉にある「ともし火」(マルコ福音書4:21)です。今朝与えられました御言葉を共に読み進めます。

とは戦争とは災害のことではなく、あなたたちと神との関係、この世と神との関係が刷新されることだと、教えられるのです。使徒パウロはコリントの教会に宛てた手紙の中でこう書きます。「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(二コリント5:17) この主イエスの言葉を聞いたユダヤ人たちは腰を抜かすほど驚くのです。そして主イエスの教えを新しい教えとして受け止めたのです。

では聖書では、天国とはどのような場所としてイメージされていたのでしょうか。預言者イザヤはこのように話します。「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては、何ものも害を加

「また、イエスは言われた。」「ともし火を持つて来るのは、舟の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、公にならないものはない。」(マルコ福音書4:21-23)

天国はすでに与えられている。その真理は舟の下に隠すために与えられている訳ではなく、全ての人に明らかにされるために与えられている。そして「聞く耳のある者は聞きなさい。」と主イエスは話されるのです。しかし、この世にあつて、ともし火は隠されています。なぜなら人々が「足りない」と感じている方が都合の良い者たちが多くいるからです。お腹を空かした人がいないとパンは売れませんが。消費者に、足りない、満たされていないと信じ込ませなければ商品は売れません。商売だけでなく教育の現場でも同じです。教師は、あなたの知識は足りない、もつと勉強して賢くなりなさいと教えます。十分に社会経済は肥大化

しているのに、まだ足りない、十分ではない、もつと働け、という言葉が響きます。加えて国家の為政者たちも、人々が飢えている方が支配しやすいのです。彼らは、私たちがあなたの欠けを埋めてあげよう、満たしてあげよう、敵から守ってあげよう、と語り掛けことができるからです。

主イエスは話します。「何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」(マルコ福音書4:24,25)

「あなたは欠けている」というこの世の言葉に惑わされないように、あなたたちは「聞く耳」を持たなければならない、と主イエスは話されます。

私たちがもし「自分は足りていない」という秤で自分自身を量るなら、持っている物まで奪われるのです。しかし「自分は足りている」とい

う秤で自分自身を量るなら、私たちは神からさらに与えられ、満たされるのです。

では私たちはどのようにすれば、この世にあつて天の国を得ることができるようか。

主イエスは譬えを用いて、弟子たちに教えます。「また、イエスは言われた。『神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、ま

ず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実がでる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。』」(マルコ福音書4:26-29)この神の国とは、先ほど話した様に天の国のことです。聖書に記されている天の国(Βασιλεία τῶν οὐρανῶν)と神の国(Βασιλεία τοῦ Θεοῦ)の意味は同じと考えて

差し支えありません。「神」と直接表現するとは恐れ多いので、「神」を「天」と柔らかく表現しているだけです。そして人は天の国がど

のように成長するか知らない、と主イエスは話します。

現代に生きる私たちは、なんとなく、種がどうやって土の中で芽をだすか、分かっているような気がしています。でもそうでしょうか。少

しばかり遺伝子を操作できて品質を改良することはできません。それに土壌の成分、水分、栄養、日射量などの環境を整えることはできません。しかし肝心な種、そのものを作ることはできません。畑に種を蒔く事はできますが、種はいつのまにか芽を出し、茎を伸ばし、葉を広げ、人の手を介すことなく成長するのです。

この世にあつて天の国もおなじように、人の手を介すことなく成長します。私たちに手をだせることは、この地上に主イエスの福音の御言葉という種を蒔くことだけです。

私たちにも少々の環境を整えることは、できるかもしれませんが。でも肝に銘じるべきは、私たちがどんなに焦っても、騒いでも、頑張っても、天国が大きくなるわけではない、というこ

とです。逆に水をやりすぎると根が腐り、肥料をやり過ぎると根が焼けます、太陽にあてすぎると葉が痛みます。私たちは蒔いた種をいつも

気に掛け、神が絶妙な塩梅で種を成長させる、その様子を見届けるのです。そしてもう一つ、この言葉から聞かなければならないことは、収穫は私たちの取り分ではなく、すべて神に捧げられる、ということ です。

主イエスはさらに、天国を芥子種に譬えられます「更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、

蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」(マルコ福音書4:30,32)地上にあつて福音の種は、芥子種のように、本当に小さな

粒なのです。そこになにか意味や力や価値があるようにとは思えないのです。しかし芥子種は大きく成長します。やがて空の鳥が巣を作るほど

に大きく枝を張るのです。天の国は必ずこの世にあつて広がるのです。

この世にあつて教会とは、天の国を先取る場所です。私たちは、満たされていない、足りていない、という思いを引きずって教会の扉に入り、礼拝を通して神と出会い、すでに与えられている恵みを確認させられるのです。真理に気づいた者たちは、神に感謝し祈り、讚美します。その喜びを、礼拝堂に集う者たちと共に分かち合うのです。

イギリスの小説家トーマス・ハーデイは「宗教の中心的な目的は、人を天国に入れることではなく、彼に天国を得させることです。」

(The main object of religion is not to get a man into heaven, but to get heaven into him.)と話します。教会の目的は頭上の天国を切望し、神を仰ぐことではありません。私たちは目の前にいる主イエスに従い、道具として用

いられ、この世に天国が実現することを待ち望むのです。

教会がもし、「あなたの信仰は足りないからもつと強くしなさい」とか「聖書の学びが足りない」とか「奉仕が足りない」と話すなら、それは主イエスの身体としての教会ではありません。私たちはすべてを神から恵みとして既に与えられていて、それでも溢れ出る恵みを教会に集う友と共に奉仕として用いるのです。教会は「足りない」という秤を捨てなければなりません。そしてその秤を捨てて「足りている」という秤を持つなら、教会に集う私たちの力ではなく、神が教会を育てて下さいます。芥子

だねのように、大きな木に成長するのです。そして信仰者である私たちは「我に神からの恵みは足れり」という言葉を日々告白しつつ、共に歩むのです。